

公明府中行政視察について（報告）

このことについて、次のとおり実施いたしましたので報告します。

- 1 期間 令和5年10月11日（水）～13日（金）
- 2 視察地及び目的
 - （1）紫波町 岩手県紫波町オガールプロジェクト
オガールの概要と循環型まちづくりについて
 - （2）気仙沼市 宮城県気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（向洋高校）
東日本大震災復興への取り組みについて
 - （3）山形市 児童遊戯施設シェルターインクルーシブ プレイスコパルの概要
- 3 視察者 福田 千夏
西村 陸
奈良崎 久和
高津 みどり
坂本 けんいち

- 4 視察内容
 - （1）紫波町 岩手県紫波町オガールプロジェクト

■町の概要

1955年に1町8カ村が合併し誕生。盛岡都市圏の南部、盛岡市と花巻市の中間に位置する。中央部を北上川が流れ、東側には北上高地、西側には奥羽山脈が聳える。国道4号など6本の幹線が町を南北に走り、インターチェンジや3つのJRの駅がある。

町では公民連携（PPP）の手法を全国に先駆け導入し、そのまちづくりが全国的に注目を集めた。JR紫波中央駅前の町有地10.7ヘクタールを中心とした都市整備を図るため、町民や民間企業の意見をもとに、2009年2月に紫波町公民連携基本計画を策定。この基本計画に基づき、2009年度から紫波中央駅前都市整備事業「オガールプロジェクト」が開始した。オガールプロジェクトが全国から注目を集め、地価の上昇や人口の社会増などの影響が出ている。

■視察項目 オガールの概要と循環型まちづくりについて

担当者

NP0法人紫波みらい研究所 事務局長/理事 橋浦律子

■視察内容

オガールとは、成長を意味する紫波の方言「おがる」と駅を意味するフランス語「gare」を合わせた造語。

紫波町には、JR東北本線が通っているが、元々あった駅の間地点に新しい駅が欲しいという地域の要望があり、これに対し、駅設置費用は地元で負担するなどの条件のもと、請願駅として整備された。

これに対応するため、住宅を増やすだけではなく、公共施設を集めて人の往来を増やすという考え方が出され、町が保有する10.7haの土地を対象とした「日詰西地区利用基本計画」が策定されました。しかし、いざ整備を始めようという段階で財政問題などがネックとなり、事実上の凍結。土地は塩漬けの状態となり、1998年から2007年まで対応に苦慮してきた土地だったという。当時の藤原町長と建設会社社長の岡崎氏の2人がキーマンとなり公民連携事業として進められることになった。

数年間手つかずで雑草だらけになっていた「雪捨て場」といわれていた土地を、当時東洋大学大学院で学んでいた岡崎氏が、公民連携を藤原町長に進言したことが発端で、その後2009年に町は公民連携基本計画を策定した。これには、条例を改正し議決を必須とし、計画策定も職員自ら1年半かけて策定した。

PFIで整備された役場は、国内最大級の木造庁舎。オガールセンターには、発達支援系の「紫波町こどもセンター」と、小児科や病児保育室、キッズ英会話や美容院、地元小麦を使用した名物ベーカリーなどの入る官民複合施設がある。オガールベースにはビジネスホテルとバレーボール専用体育館（オガールアリーナ）を軸に、コンビニや薬局、居酒屋などが入るエリア。アリーナは、国際規格をクリアした日本で唯一の専用体育館施設。オリンピックでも使用されるフランスの Taraflex 社製の床があるのは全国でも珍しいということ。全日本チームなどの合宿、世界大会でのナショナルチームの練習場としての誘致などが行われている。また、プロジェクト対象地の一角に57区画の住宅地を設け、オガールタウンとして町が直接、分譲している。建物は紫波型エコハウス基準を満たす住宅のみとなっており、指定事業者講習会を受けないと建築できない。そして、この講習会を受けたのは町内の事業者だけとのこと、域内の経済政策にもなっている。

オガールの概要及びエネルギーステーション・循環型まちづくりについて講習を受けました。エネルギーステーションでは紫波の間伐材を利用した木質バイオマスによって、役場やオガールタウン、保育園や住宅などへの地域熱供給が行われている。これは、地域資源の活用やお金を内部で循環させるというだけでなく、石油やガスのエネルギーコストが急に値上がりしても、地域の木材が原料なので、安定した価格でエネルギー供給を受けることができるというメリットがある。紫波町では2000年6月に、「循環型社会の構築を担うのは町民一人ひとりであり、今の暮らしを見直し、変えていくことが何より大切であるという思いを込めて」、「新世紀未来宣言」を発表している。この宣言に基づき、2001年には「紫波町循環型まちづくり条例」が制定された。その条例に基づき「紫波町環境・循環基本計画」を策定。その中では（1）資源循環のまちづくり、（2）環境創造のまちづくり、（3）環境学習のまちづくり、（4）交流と共同のまちづくり、の4つの方針が掲げられました。この方針に基づいて、「えこ3センター」と言われる、堆肥製造施設、間伐材等炭化施設、ペレット製造施設などが作られ、堆肥を活用した土づくりや、地産地消が進められている。給食の残渣も「えこ3センター」で堆肥化され、資源循環の中に組み込まれている。町産木材の活用も積極的に進められ、2001年に完成した紫波中央駅では町産木材が多用され、紫波町の公共施設で多くの町産木材が使われている。

■感想

10.7ヘクタールの開発に対し、行政主導の開発をやめ、民間主導の開発として、環境や景観への配慮、財政負担を抑えながらの公民連携による町づくりの成功例として勉強になりました。何より子どもを真ん中に見据えた考え方に感銘を受けました。規模や町の資源は異なりますが、府中市の基地跡地や環境対策、子育て支援として、持続可能なまちづくりに活かしていきたいと思います。

（2）気仙沼市 宮城県気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（向洋高校）

■市の概要

宮城県の北東端に位置し、東は太平洋に面する。東部の唐桑地区から気仙沼地区にかけては、三陸の他地域と同様にリアス式海岸が特徴的である。同じリアス式海岸でも当地方では岩手県沿岸と比較して標高が低く、なだらかな丘陵が多い。唐桑半島と岩井崎の間では、深く入り組んだ海岸線が波の穏やかな気仙沼湾を形成し、湾内には大島が浮かぶ。2011年（平成23年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では、地震そのものの被害に加え、津波や火災（津波火災）、地盤沈下によって大きな被害を受けた。

■視察項目 東日本大震災復興への取り組みについて

担当者	語り部 今川 悟
-----	----------

■視察内容

気仙沼市向洋高校跡地に建設された震災遺構・伝承館。当時、向洋高校には生徒・教師・改装中校舎の工事関係者約250名位がいたそうです。校舎は海から約150m、海拔は0～1m位の立地条件下で13mを超す大津波に襲われながら、臨機応変な迅速避難で奇跡的に誰一人犠牲者が出なかったそうです。この震災遺構・伝承館は、津波で4階まで被災した気仙沼向洋高校の旧校舎を震災遺構としてそのままの姿で保存しており、伝承館では当時の記録映像や写真等で被害の様子を知ることが出来ます。東日本大震災の大津波襲来の壮絶な動画や爪痕、感涙する地元中学生の卒業式の答辞・語り部による奇跡の避難動向等の説明等「防災意識の啓発できる館」として全国各地から多くの見学者が訪れています。震災当時の状況を、被災をされた地元語り部の方から話を伺いました。

■感想

東日本大震災から12年半。町の復興が進む中、遺構として残し将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することが目的で、今後維持していくことが課題と伺いました。中学生も語り部として活動しているそうで、継続して進めていくことが防災教育・命を守る教育につながるのだと思います。当時の避難行動を聞き、一人も犠牲者が出なかったことが本当に奇跡的なことだと、震災当時のままのがれきの状況を見て実感しました。

ぜひ防災教育として府中の子どもたちにも観て触れてもらいたいと思うものでした。語り部の方が地元の市議会議員ということで、復興までの議会の取り組みもうかがうことができ、府中の防災・減災に生かしていきたいと思います。

(3) 山形市

児童遊戯施設 シェルターインクルーシブ プレイスコパル

■市の概要

山形盆地の南部3分の1ほどを占め、盆地の東南部に位置する扇状地の上に市街地が立地している。盆地中央部である市の北、北西方向は広く平地が続き、広大な田園となっている。市の東部は奥羽山脈による山岳地帯、南西部は丘陵が占めている。山形県の県庁所在地及び県内で人口が最多の市で、周辺11市町村と共に「山形連携中枢都市圏」を形成している。この参加市町村を山形都市圏とした場合、人口は約51万人で東北地方では、仙台都市圏・郡山都市圏に次いで3番目に多い都市圏人口である。

担当者

館長 色部 正俊

■視察項目

シェルターインクルーシブ プレイスコパルの概要

2022年4月にできた児童遊戯施設。「すべてが公園のような建築」をコンセプトに雨天時や冬の期間でも、のびのびと遊べる施設で、障害の有無や国籍、家庭環境の違いにかかわらず、すべての子どもたちに開かれた遊びと学びの空間となっている。

2015年度に山形市が策定した「山形市発展計画」重点施策のひとつに、「子育てしやすい環境の整備」を掲げ、新たな子育て支援拠点を市南部に整備すると定めたことが起点。

市の北西部には2014年に〈べにっこひろば〉という子育て支援施設ができ、年間25万人以上が来館する人気施設になっていたが、混雑の解消など、いくつか課題が見え、そのため南部での計画では、新しいふたつの前提条件が提示された。①「PFIの導入」②「インクルーシブ」

有識者による「創造会議」を設け、そこでテーマを検討するワークショップで「生きる力」「インクルーシブ」「地域共生」を3つをテーマとした。コパルは、特別目的会社（SPC）が設計・建築し、完成後に市へ所有権を移転したうえで、SPCが指定管理者指定を受け、15年間の契約で運営・維持管理を行う「BT0方式」を採用。

施設年間利用者数を15万2000人と設定していたが、コロナ禍の影響はあったものの、月平均約1万500人、2023年3月は1万8000人台となり、15万人を超えることができた。2年目は、18万人から20万人を目指す。

建築・外構・遊具が一体となったデザインで、スロープでひとつながりに回遊できる構成など、建物全体が遊び場という斬新な計画で、これまでまったく目にしたことのない画期的な建築で、2023年日本建築学会賞も受賞するなど、建築作品としても話題になっている。

■感想

まず建物の形、広さ、環境のすばらしさに感嘆した。建物内では小さな子どもたちが、スロープを駆け回り、遊具に上って遊んでいて、床の上を裸足で走ってとても気持ちよさそうでした。大型遊戯場にある大きな木製の滑り台。傾斜は奥へ行くほど緩やかになる。傾斜を上る方法も、斜面を駆け上がる、手すりのある階段を使う、ロープを使う、遠回りしてスロープを上るなど子どもの運動能力に合わせてさまざま。『ヴォーチェ』という重度障害児の療育施設を運営しているところと、NPO法人『生涯スポーツ振興会 アプルス』という運営会社が2社入っている。そのため話し合いを重ねながら試行錯誤し作り上げた施設と伺った。

エピソードとして、屋根がユニークな曲面状につくられているため、屋根に降った雨水が1か所に集まり、滝のように流れ落ちることが完成後にわかり、公共施設であれば即修繕というところを、館長はそれを『コパルの滝』と名付け、『雨の日はここで滝が見られます』と貼り紙をされました。それを見た親子が、『今度は雨の日に来てみようか』と会話していたと聞きました。異なる個性を是正しなければいけないものと捉えるのではなく、前向きな価値に変えていく。まさに、インクルーシブな考え方だと感動しました。準公共という立ち位置で、施設内に子育て支援センターもあるため、プレママ・パパにとってもきっと心強い場所であると思います。府中市においても児童遊戯施設という特化した施設がなじむのかはわかりませんが、インクルーシブの理念で誰もが安心して遊べる環境づくりに役立てて行きたいと思っています。

5 添付資料

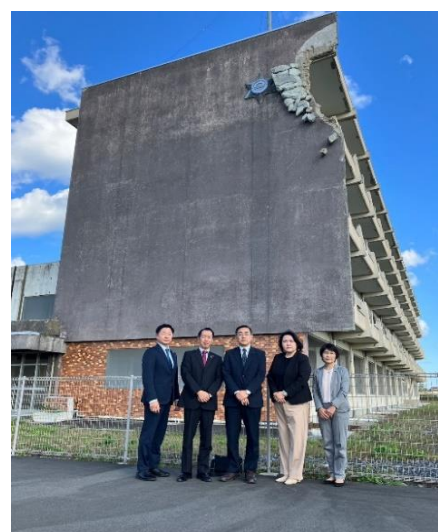
ア) 説明者等の名刺写し

イ) 行政視察中の写真

■紫波町オガールにて



■気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館において



■ シェルターインクルーシブ プレイスコパルについて



- ウ) ①まち人OGAL
- ②オガールエリアガイド
- ③紫波町の循環型まちづくり
- エ) ①気仙沼東日本震災遺構・伝承館ガイド
- オ) ①シェルターインクルーシブプレイス コパルパンフレット
- ②市南部への児童遊戯施設整備事業について